

平家物語圖會 前編

13
2693
12-1



13
門
卷 1-12



平家物語

平家物語圖會自叙

源光朝
撰

夫喜怒哀樂愛惡欲謂之七情。人無不有。只其發中節者聖也。不中節者凡也。神釋戀喪若世態也。七情與世態交而狂言綺語成焉。世有平家物語。其流布也舊矣。憶此作成。緇徒之手。故詭譎方便過半。雖然。源平兩家立于朝。一盛一衰。自六條天皇仁安。至安德天皇壽永。平族奢美。萬民之惱亂。如目擊然。抑平清盛公微也。

平家物語

出入于花族貴門。掃鬚塵。拭羹汚。童子戲喚名。
高平太保元平治以降。僅識于世。其祖正盛。藏
人仕五位家。執袪困受領之鞭。後擢至正四位
下。父忠盛自堂下。武士昇漸。交殿上。其子而立
地。究人臣位。官丞相。祿數邦。一門悉列公卿。會
半日本。強為帝王外祖。長失人臣禮。追捕權門
勢家。損亡雲客殿上。沒倒其莊園。擅屬子孫。擅
奪其資財。濫與所從。進退帝位。奉射親王。無怕

容。焚失佛寺。屠斬僧侶。不酸色。刺遷法皇於城
南離宮。流博陸於海西絕域。雖並悚虎威。貴綫
束。緇素戴足。古來雖有叛臣。未有若斯。本邦
王法。當此時將墜地。天下士庶。欲噉生其肉。存
忠者不堪。而適雖有起兵者。或有反忠。或兵不
足。不遂事。慙為朝敵。而以不痛哉。相國禪門。偶
免水死。而火薨者。僥倖耳。積不善餘殃。及宣統
平氏。漂西海之波瀾也。沈浸月潮。汐深憂危。掩

霜蘆葦。脆命。皇居行宮。唯扁舟。如龍頭鷁首。何
卿相入埴。生小屋。奈金殿玉樓。何。鳴銜噪。洌渚
增曉怨。楫聲響。磯間傷夜魂。曉啼遼海野。鴈則
愕。兵士竟夜漕。艦見簇。遠松白鷺。則疑漁氏昧
爽。舉。簷。翠。帳。紅。閨。變。葉。簾。露。屋。銀。燭。熏。烟。化。蜃
藻。鹽。火。暨。猪。方。維。義。逐。平。族。於。太。宰。府。也。公。卿
徒。步。女。房。素。洗。破。足。鮮。血。益。紅。裙。色。踰。嶮。攀。峻。
裳。衣。寸。裂。亂。白。袴。裔。遺。調。度。捐。筭。箒。墮。寶。失。珠。

其艱其難。不俟言。竟有天運。循還之期。倏視盛
者必衰之理。鎌倉右幕下起東園。岐蘇義仲發
北國。岐蘇先入。追平家。鎌倉範賴。義經後及。討
岐蘇之非法。彈平氏於攝州一谷。讚州八島。長
州壇浦。多有子遺焉。平盛源。衰世保元。壽永。雄
榮花榮。耀娛二十餘年。夢後白河。法皇肇視。白
日晴天。宇宙億兆安堵。勲業。鎌倉家勲績。於是
乎廣矣。大矣。人物之善惡。是非。將士之智愚。剛

あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に
あはれなる御書に

平家物語

平家物語作者并琵琶法師諸物之事

此物語作者の正定せむ勸修寺良門の後孫葉室家と云ふ人入道開えり。説に後鳥羽院の朝北國平家信濃前司行長と云人あり。温故の名譽あり。後文学と捨く道世と多と慈鎮和尚ハ一藝あゝもの貴賤を別し情をわけし。入道と厚く扶助し。多ひたり。入道或時此物語を著。性佛といふ警者にを琵琶法師の諸ひりひりせし。此ハ兼好法師の徒然草にも出たは。皆人筆力と云。先哲の評に義經の事も委し。書載し。行長入道慈鎮和尚の顔淺くさり。報事ある。渡せるこそ遺憾かれといふ。又性佛ハ東國の武士ハ問尋させ筆記せし。琵琶法師といひ。武士のこら馬の業等と性佛といふ。東國の武士ハ問尋させ筆記せし。琵琶法師といひ。平家ハ性佛の後を如一檢校と云。此弟子覚城乃兩人あり。傳て今に及ぶ。絶て大寺おけて頻寫法會ふ。必ま高官の琵琶法師と請く。語り。是法座にほ。多衆中長座の退屈を慰か。為且平家一門主従の名をも語出。自然と貴き大法會に遇。修羅道の苦患を休め。出離生死頭證菩提の縁。人の意の。數百年に傳ると。作者行長入道も希有の功德多し。備又長門國赤間の關門於陀寺と云。安徳天皇の御寺なり。平家物語八十六卷の寫本あり。世に十六卷の長門本云。是より抄出せる。此外に八坂本鎌倉本嵯峨本等あり。此物語時代も。書に。今めり。珍重と云。世に。婦女兒童の卑陋と云。高に耳不通。時に隨て里巷の卑語に換。金沙。弄。淫泥と貯。思ひ大方の君子何と評せん。慚愧被然せ。んや。

文政十丁亥臯月

高蘭山翁再誌



平相國清盛公



源三位頼政入道

平家物語圖會卷之首



其二





平家物語圖會

摠目錄

卷之壹

○平家の起原清盛公繁榮妓王妓女佛御前の榮枯

平忠盛朝臣御堂の法師を捕る圖

白拍子妓王障子小詠歌を書残す圖

○近衛院二條院二代の后延曆額打論攝政の供人資盛の無礼を咎

佛御前發心祇王の庵を訪ふ圖

○新大納言成親卿謀叛山門神興を振奉つゝ師高兄弟が遊行を

訴松を

東山鹿谷俊寛が山莊會合の圖

叡山の大衆神興を振奉待賢門より入奉らんとする圖



平判官入道清頼

平家物語圖會

卷之二

○多田行綱返忠成親卿一身黨類被召捕重盛公憐愍

殿岳の大衆母主を奪めて登山の圖

多田藏人行綱入道殿へ密謀を注進する圖

○重盛公新大納言の命乞門脇教盛卿丹波少將の命乞重盛公諫諍

相国入道西光法師が頭を足下に踏蹂圖

小松重盛公諸軍を召する圖

○新大納言配所ぬ卒去藤藏人謀めて徳大寺殿昇進鬼界鳴ゆ

康頼卒都婆を流す

源左衛門尉信俊大納言入道の御返良を北の方へ奉る圖

卷之三

○丹波少將成經平判官康頼法師赦免中宮御産皇子御降誕

俊寛僧都赦免に洩く悲歎の圖

清盛公安藝守より時高野山へ老僧を遇忽見失ふ圖

○有王俊寛が専途を見小松大臣病名医を拒同逝去

丹波少將帰洛し門脇宰相の真入圖

静憲法印法皇の御使を蒙り剛勇を顯す圖

○平家より関白殿を流罪し公卿殿上人ヨメくの官を削法皇を

鳥羽殿へ押籠奉る

江大夫判官遠成父子煙中へ切腹の圖

卷之四

○主上を降し春宮を踐祚する奉る高倉宮御謀叛頭と御所を崩せぬ

中原康貞紫藤を松ちり折く献る圖

源三位入道高倉宮小御謀叛を勸奉る圖

○長谷部信連剛勇の勸高倉宮園城寺入御衆徒を頼る

伊豆守仲綱が名馬木下ぬ六波羅ゆく鐵燒さる圖

○云位頼政入道父子自害高倉宮御最期三井寺炎上

足利又太郎田原忠綱宇治川を渡さる圖

六條亮大夫宗信臆病の圖

卷之五

○都を福原へ遷す頼朝卿東國の旗を揚る文覚上人荒行並圖

入道相國物恠を見圖

相國入道積悪究と重盛公感夢の圖

○佐殿院宣を頂戴平家より討手の將士七万餘騎富士川より逃上る

薩摩守忠度女房の局忍軒下ぬイミ扇を使入圖

○都を平安城へ還す中將重衡薩摩守忠度を將として奈良を攻

新院崩御

平家富士川陣拂狼唄の圖

南都東大寺炎上の圖

卷之六

○小督殿と捕尼とる良木曾次郎冠者義仲信仍の旗を建

殿守の伴の宮奴縫殿の陣小寄酒を焼る圖

彈正太弼仲國秋夜馬を馳て嵯峨野小督殿を訊る圖

○四國西國平家小督太政入道熱病の薨去城資永永茂が軍支

入道相國千のの水を湛と熱病を凌る圖

城資永出陣の途中雲を掩る圖

○越前國火燧城軍加賀國砥浪山軍木曾殿妙策

羽丹生八幡願書と納る圖

卷之七

○加賀國篠原合戰實盛討死山門の大衆木曾殿の語と平家小背

俱利伽羅谷ゆく平家の大軍塵ふらるる圖

入善小太郎行重賺しく高橋判官長綱と討圖

○主上供奉平家都を避經盛卿の息經正御室の御刃御暇乞

右馬頭資時御所より法皇を倡ひ奉る橋内左衛門宿直の圖

經政御室の御所は青山と号る琵琶と奉て御名残を被惜圖

○青山の琵琶傳來の説平家福原を落繩を解く西海ゆ漂ふ

大唐廉妾夫の岡而帝へ琵琶の曲を傳奉る圖

卷之八

○木曾義仲藏人行家都へ入高倉院四の宮法皇へ召る

法皇山門圓融坊へ入御の圖

平家の人々筑紫ゆく歌と詠入圖

○緒方維義九列の平家を追出前右兵衛佐殿將軍の院宣と賜の

緒環を附く密男の行衛を祀る圖

備中國板倉川ゆく倉光成澄瀬尾兼康組討の圖

○播洲室山軍藏人行家働木曾法住寺殿と攻奉り狼藉と成

義仲狼藉依殿上人大勢法親王大僧正追討と成る圖

卷之九

○範賴義經宇治勢ヲ破石田為久栗津原ハ義仲を討
佐々木梶原守治川先陣を争ふ圖

今井四郎中原兼平自害の圖

○二谷軍熊谷平山先陣を競ふ生田杜軍梶原平三二度の蒐
生田森軍梶原源太腹ハ梅花ヲ折替戦ふ圖

梶原二谷鶴越坂落の圖

○二谷落城平家諸將士討死一門再び海上ハ漂ふ
岡部忠澄忠度と組討熊谷直實敦盛を招圖

卷之十

○平家諸將の首大路を引渡セ法皇瀆列の平氏ハ院宣を下さる

院の使花方ハ顔ハ焼印を當らるる圖

本三位中将重衡卿法然上人を請する圖

○重衡卿関東下向小松三位維盛卿高野山中ハ剃髮ス

千々前中将重衡卿ハ酒を勸る圖

雜司女横笛滝口法師ハ坊を拜る圖

○小松三位中将維盛入道入水宗清義氣佐々木盛綱藤戸の海を渡セ
小松三位維盛入道那智奉詣の圖

卷之十一

○讃洲ハ島軍義經武功景清水尾朝引義經誤る弓を流セ
摂州渡邊ハ義經梶原景時逆艦争論の圖

佐藤嗣信義經を拘る立塞能登殿の箭小射落るる圖

○伊勢三郎智計教能を降は壇浦船軍平家滅亡

那須與宗高扇を射切圖

豊前國門司關長門國壇浦ゆき平家の面く入水の圖

○梶原義經鎌倉殿義經を勅氣せしむる平宗盛公父子梟首

大臣殿以下大踏を引渡さるる圖

卷之十二

○土佐房正俊堀河夜討伏誅義經都落難風小吹戻さる

南都ゆき二位中将重衡卿を誅する圖

辨慶土佐房小同馬堀河連行圖

○頼朝卿日本國摠追捕使を賜ふ文覚流罪六代御前を斬む

六代御前首の座(文覚馬を飛し救ひ来る圖

○平家物語圖會灌頂卷

○建礼門院御落飾吉田より小原御程住法皇小原御幸

建礼門院尼寂光寺御幽栖の圖

彌陀如来引接の圖

○御往生

已上

平家物語圖會摠目錄終

平家物語圖會卷之十二

凡例

○平家物語發端。祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響ありと書く。天竺の月蓋長者の家富榮へられた。邪見放逸ゆる。釋尊五百人の羅漢と引く。託鉢修行のた。長者一錢撮の施をせ。釋尊是を化度し。佛法の飯せ。先多へ無二の信者とする。資財を抛く。祇園精舎と宮立。秋のふ。今云大堂伽藍。鐘を架く。撞其響自然と諸行無常を現す。老も若きも。死一行さへ入る。千萬羊も常住すること。叶ぬ故無常と云。沙羅双樹へ天竺のあり。花咲く。と眺る内ふ。つらひ来る。頻く散落る。盛るものも。つら。暮る時。花開く。より最早散る。の知く。ある小異る。太政入道官。祿身小餘。一門まど。栄花と究美服美味。管絃舞樂。酒色小耽る。咲る。花小等。へ衰。散時。や。

是を戒く。諸行無常。盛者必衰の句を取。然る。入道相。困忠盛の子。とのた。実小祇園女御の生。清盛へ云。入。天下を己。物。栄耀の限を。其根元。祇園女御。ゆる。も。祇園精舎の鐘の聲。と。書。是。ホ。筆を取。の活用と云。の。○此物語。ハ。書。り。も。古。風。る。也。引。書。ゆ。も。用。る。と。あり。され。た。あ。る。び。る。辞。た。へ。女。兒。の。耳。小。遠。き。あり。一。ツ。中。之。紙。數。も。張。大。小。至。る。衆。欲。せ。ざる。ま。此。彼。書。更。る。処。多。し。止。て。成。る。べ。ん。凡。此。物語。を。讀。見。女。心。の。と。ち。る。べ。ん。種。々。を。ツ。ツ。か。く。會。得。し。ま。せ。う。う。む。と。下。の。ト。○法。皇。ハ。天。子。御。位。を。讓。ひ。て。太。上。天。皇。と。稱。し。そ。ま。か。れ。剃。髮。佛。門。へ。入。ら。る。を。云。へ。○二。院。ハ。天。子。の。出。院。居。二。方。を。以。て。時。小。先。ち。る。と。一。院。次。ち。る。を。新。院。と。稱。す。○女。院。ゆ。う。い。ん。と。訓。下。女。御。女。房。と。同。例。へ。女。一。の。宮。女。二。の。宮。へ。め。よ。と。め。り。訓。來。れ。り。天。子。何。番。目。の。出。女。と。云。と。三。番。目。の。

女子ちるく女之宮と云○大内山とハ則内裡の云々。雲井雲の上と云
○大臣以上ハ某公ニ位以上ハ某卿と書例ハ但一武將ゆへて公の
字を書くと太平記中比より頼朝卿頼家卿実朝公と書ハ三代目右大
臣ころゆえ也○春宮東宮の兩様通ト用也。実ハ一ハあつた帝の皇子
親王宣下あつたよりハ品某親王皇女も宣下の後某内親王と云。叔親王
よりハ跡嗣と定る方を儲君又太子東宮也。内裏の東ハ御所を建ら
る御所の名を春宮と云○神達部とハ殿上人也○行幸ハ天子ハ限る也
○御幸ハ法皇新院仙洞中宮ハ御書之行と御と字差と檢同ト平家
物語五の巻の初ハ治承四年六月三日福原ハ御幸と書かつた行幸の誤也。
こゝハ時の主上安徳天皇の行幸ハ其外所ハ行と御と取違あり。皆改め正
ま親王と宮ハ行啓と云○當今今上其時々の主上也○三位を別也

と云ハ親音をさるんと訓ど。上の字を馳とよむハ下を約と訓と定式
ハまうりとも位音と仮字を附せ也○太輔少輔ハ省の下司輔の大
小ハまうりともせうともせうともと訓誤辨をのうの音と其誤來る事也
旧ハまうりとも皆仮名を少輔と改るとむ時ハ左も右も心次第と云。甚ハ其也。
伊勢太輔をいせのちまけと訓也。餘ハ小音キト云ハ省と云。中務官内武部
大藏 ○右兵衛督 右兵衛佐 右衛門尉等。右の字を別と云。頼朝卿右兵衛
刑部 佐殿と云○山門ハ小堅者と云ハ僧の職也。然る小堅ハ本字堅也。まうり
と云音ちるを天台宗從來誤本と云今改と云○三井寺ハ比叡山の赤木本
名園城寺也○三井寺の清瀛院紀別那智の飛瀧權現皆龍をりうと訓
此字ハろろ龍とろろと訓也。のりより誤瀧也。あつた龍をこゝと訓ハ更
ハ解と云。漢字を用るるハ漢主ハ飛泉懸水瀑布をテ用と瀧と

〇二卷丹波少將の辞禁廷筑紫太宰府より腹赤
 の頁を献る其使歩行路十五日と定るよう書は是平家物語を筆せし人の
 不穿鑿之筑紫と九洲の摠名之肥後國宇土の腹赤濱あり腹赤地名也
 魚の名ありは景行天皇筑紫を巡りてある時此処ゆく魚を供御せり
 例ゆへ古より大内へ献せり太宰府より丹波少將を遣はるを知らざるは余
 筑紫と云より太宰府と書し作者推量の間違を云ふ頃の名抄小鯨の字を
 出でたこと此字字彙正字通康熙字典にみざれば日本限の字とせり此
 所ゆく網一献せり何と云定めり俳諧季寄の鈔のるこは腹赤の鱒と
 云ふもふふは腹赤と云濱ゆく捕魚と云ふも平家物語部ふるも僻言也
 餘多るは六物の明澄を引用するは足ばといは唯其書ぶりの古めり死の墓
 〇山と云りあるは比叡山のてし〇寺と云ふは井寺のてし〇奈良と云ふは興福寺の

東大寺の内を云〇上目の者云地下ゆき勤番小當り若居る者〇咫尺と云
 側近と云〇和州神南備山へ別々南備之此類積法煙をけむりと別 飯を
 けあり外際限なく〇志々〇六の巻小仲國を供ふ具〇面部吉住と云は
 めがきうちをうた云々今仕丁に禁廷の小人をけり今世の物毎取ゆては
 除るはねがらちをうたの人も是を誤り〇天下諒闇と云内裏の御中陰
 〇日吉住吉と云と別は後世の事〇木曾先生義方城太郎助長他書
 照一考へ義賢資永の文字改む凡此類外も一〇述は〇甲と云は
 るは非甲曹と云ひうぶと云俗前取遠末たり〇官名の皇后宮后へと云
 別はこと別〇行宮と云帝王行幸輿の止る所と云〇龍頭鶴首と云
 天子の御船と云鳥水災を除るの意船小彫つる〇八卷木曾殿猫
 間中納言殿の食を進むるは合子と云中ゆく口の合入る今も

食菴の類也。○牛飼を小半健兒といへども一健兒と云へばけりあること云々
 ゆく程死者の名目不足程辨をも健兒と云ふことわりと云ふ兒と云ふこと
 加へて友ぢもいへも同意也。○蔥花鳳輦へ天子の輿に蔥花へ宝珠の形
 鳳凰の鏤ある輦也。○駕輿丁と云ふ帝の輿を昇者を云。○三條中納言朝
 方卿壹岐守朝親が子壹岐判官朝泰と云類朝の字にわさと加へて名乗
 小用と云ふ置てくわさ。下小置てくともと加へてとも義朝の次男朝長
 父の諱字と上小用る故に小山朝政結城朝光と云の二字貫ひ清と云類も同例に
 唯一通下なるは小倉山百人首小中納言朝忠朗林集の朝綱皆わさと加へて
 知登。○鎌倉院宜と賜る段小館の躰を云と内外侍わりと云間席のつ
 めく玄閑の遠侍と云同ト。土の美あはる。○九僧の名々貴賤拘ら
 具音小加と通例に木曾殿の子書大夫房覺明をうめい天台座主明雲

大僧正と云へん。三井寺の圓慶法親王と云へはいと平家物語に加へて
 白名。世上多く漢音小加は甚僻言と云へ佛經の熟字を各小つ。正覺
 の覺無明の明を云く。光明と云へ漢音よ訓に云あり。くも不吟味と
 別を具と云へく。本を讀ん片言小異ある。第一耳小立と云ふ也。昔
 右等の誤へ悉くかみ附を改正。○丞相の仮名と云ふ。少將の仮字は
 一と云へ此三ツのま細字繁た彫刻の煩しさを厭ひ丞相少將と云。仮字差と
 笑と云へ。○九卷目小佐と云。木字治川の先陣。一。宇多天皇小九代の後
 胤近江國住人佐と云。木三郎秀義が四男。佐と云。木四郎高綱と書る。其の
 誤へて云へく。秀義が九代ゆ。高綱は十代。其上二郎秀義の弟。佐
 木の家。宇多天皇。敦實親王。雅信。扶義。章經。經方。李定。未考。義と
 續。秀義の佐と云。木源と云。十二の時源廷尉為義の養子と云。保元平治

め、義朝の随ひ、武功度、壽永三年七月、伊賀國平田城を攻落し、痛み
 負七十二歳ゆく死、鎌倉殿勲功第一と定らる。九代目高綱、又佐木三郎
 と盛綱とく、四郎が兄、彼是混と三郎秀義、然、宇多天皇九代の
 後胤佐木四郎と書く。秀義が四男、削去と書べ。今改正凡、信太
 三郎先生義教と義仲の伯父とあり、是れ帶刀先生義賢の弟、是れ義仲の
 叔父、僅伯叔の字、遠く是れ不穿鑿也。○若黨と云、今少身者の家、来陪
 臣の供人など、と違ひ、武吉若党と云、故古の餘、千石二千石の身分
 も若輩者、若黨一、條次郎義仲を討んと、即等、小下知、詞、洩、す、ま
 若黨と云、難、し、人、の、今、を、知、く、古、を、あ、ぬ、故、也。○巴、が、東、國、へ、落、と、
 云、他書の説、大、小、異、唯、是、平、家、物、語、の、説、任、せ、り、款、冬、と、云、も、唯
 原本、は、後、は、但、一、獨、は、愚、が、述、し、星、月、夜、頭、晦、録、の、附、録、小、巴、款、冬、の、こ、と

と書す。専ら海内、行、も、ぞ、り。是、を、く、更、り。○田代冠者、俗、姓、冠、者、
 中、と、書、一、然、然、と、田代の冠者、僧、の、如、く、實、也、と、難、者、入、あり。左、の、あ、り、今
 諸國の武家、列、座、と、是、れ、素、性、の、後、三、條、院、の、皇、子、輔、仁、親、王、の、五、代、の、
 王氏、遠、く、凡、さ、ら、ぬ、又、僧、俗、の、對、言、の、あ、り、云、と、凡、俗、と、の、差、別、ゆ、え
 ○根津、は、せ、ら、ほ、と、別、也。紀、伊、の、訓、は、根、津、判、官、紀、伊、守、が、別、也。縦、心
 百人、首、の、式、子、内、親、王、家、紀、伊、と、別、也。と、云、は、り、い、は、ら、げ、さ、り、ち、ど、あ、り、ぬ
 と、を、別、人、も、ま、り。か、る、片、言、の、訓、と、生、涯、國、字、を、も、満、足、は、續、は、れ
 ば、我、独、續、と、云、と、多、ど、聊、可、と、辨、は、り、入、ぬ、笑、と、云、也。○林、下、と、草、鞋、の
 ぞ、草、鞋、と、作、ら、る、也。○梶、原、源、太、景、季、熊、の、梅、と、平、家、物、語、の、一、條、書
 より、補、ふ、此、類、外、中、も、ま、り。○蒲、冠、者、九、郎、冠、者、小、従、ふ、回、の、姓、名、源、平、盛
 衰、元、義、經、記、の、類、を、按、比、さ、る、少、く、づ、相、違、あり。実、名、も、相、違、言、け、し、は、孰、
 七

正人二三人ありて平家物語のまふ仕に○鹿の字はあつたを唱へ
 鹿のあは別ゆく猪と書鹿狩と書バあがりて不龜の二字はあつた
 だ別あつた豚と書此類世俗心は遠まゝ○乳母の子を乳母子と云世俗の
 乳味兄弟是之乳母の夫の乳夫林同くけは乳母の夫と指直小乳母と云平
 家物語のまふ仕に○十の巻小松三位中将維盛卿の容小紀刻
 山傳と洛の妻子の友到んとあども祖父本三位中将殿の生捕小せんと
 と云此祖の字叔の字を誤し之本三位重衡卿の重盛公の弟中く維盛卿の叔
 父○悉言太子の馬金泥駒とは何の書取く書しゆ義楚六帖の健勝
 馬とあり○義經と左衛門尉小使の宣旨を蒙ると檢非違使の宣旨
 判官も同し其唐名を延戸と云新帝即位の由宣旨と云は法皇院中か
 院宣と云宮中の給る令旨と云○鎌倉殿の御教書と云天子法皇の勅旋
 院宣と云宮中の給る令旨と云○鎌倉殿の御教書と云天子法皇の勅旋

天下の政務を行ひぬ其方よりゆた文書と云足利時代より武將の命と奉て
 管領執柄よりゆるを御教書と云今も執政家よりゆる文書御教書
 ○北面院小限帯刀の東宮小限も其司帯刀先生の内ゆ四衛府あり北
 面帯刀たふす○土巻小限小知らるるごと書し知安きと云と知安を
 と書改りて此類一部所ふも○浅利與某が具足ゆく仕ゆは具足と云
 鑑のことふあふ夫も太刀も其身の用足りの具とあふあふゆ浅利が
 強弓小相応する所持の矢と云然を其身相應所持する鑑も曾も具足
 と云鑑。具足と云鑑小限と云あつた
 きあ思界其意味を記し皆省く○所く二行小書するも早く分別さる
 る之凡そつひに古假字音韻鏡小因て記し以上平家物語のまふ仕を
 何事も忘る七別は半ゆ免

追附言 平氏二十餘盛畧傳

桓武天皇御曾孫平高望王初平姓ヲ賜其八代

○忠盛 正四位下備前守 貞正 忠盛弟 忠正 同上

○清盛 忠盛嫡男實鳥院 重盛 清盛嫡男母在尼 維盛 重盛嫡男

家盛 清盛弟女池禪尼 基盛 重盛弟 資盛 維盛弟

賴盛 同正位大納言 息 宗盛 同從五位左衛門

教盛 同從五位中納言 息 知盛 同從五位右衛門

息 通盛 忠盛 息 知盛 同從五位中納言

同 敦盛 業盛 息 知盛 同從五位中納言

經盛 同參議正三位 重衡 同母三位

息 經正 經復 清貞 同從五位下

忠度 同五位下薩守 清房 同從五位下淡路守

女子千田判官代親政室 女子建礼門院 此餘女子七分略之

○平氏子孫繁茂ノ趣ハ系圖ヲ照シテ 知一ノ氏家門ニ非ス凡平大納言

時忠卿ナド公停尼公妹ヲ北方迄

ヲテタレ其時ノ主論ナリ其子讚岐中

將尼公甥ナリ又相國入道智ヲリケバ

其子外孫三何是實平家ノ門ト云也

平家物語圖會卷之一

東武 高井蘭山翁述

平氏の起原清盛公繁榮妓王妓女佛御前の榮枯

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色盛者必

衰の理と顯と著る者久しく。只夏の夜の夢の如く。猛死人も遂

少減ぬ偏小風の前の燈ふ似たり。本朝の昔兼平の將門天慶の純友

康和の義親平治の信賴驕も健も。其後六波羅の入道前

太政大臣平朝臣清盛公と申一人の形勢を公詞も及ぶ。其祖を云ハ

人皇五代桓武天皇第五の皇子一品式部卿葛原親王の也孫高望王の時

始て平の姓を賜ふ。從五位下上總介小叔魯あり。其後忽ち王氏を以テ

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

臣列其子鎮守府將軍良望後小常陸大祿國香と改將門と號ス。其

其子鎮守府將軍貞盛（藤原秀郷と俱小將門を討て其後男権衡より六代目を正四位下備前守忠盛とりの文覚の人の）是代諸國の受領なり（一）忠盛（小）至始（一）昇殿を聽され七十五代崇徳院の御時仙洞（一）の執柄（一）を經昇られ（一）或時備前國をよら（一）小院（一）を明石の浦（一）を仰ら（一）と云

あつ明の月も明るに浦風あり波をうりてそよるとまゝと

とやと云る故御感の餘王俊頼朝臣金葉集勅撰（一）此歌をいれ又永久の末幸祇園女御（一）白河法皇（一）鳥羽院の皇祖（一）の幸人あり（一）東山の麓祇園（一）に栖（一）る法皇每度（一）思ひの御幸あり（一）一夜殿上人（一）二人北（一）面少（一）具（一）と忍（一）む比（一）八（一）月（一）廿（一）日（一）餘（一）り（一）ま（一）宵（一）多（一）む（一）と（一）陰（一）育（一）雨（一）の（一）凄（一）き（一）折（一）る（一）か（一）の（一）栖（一）を（一）は（一）御（一）堂（一）あり（一）に（一）傍（一）に（一）下（一）る（一）あ（一）や（一）の（一）光（一）物（一）生（一）る（一）は（一）六

まゝらぬの針と磨（一）立（一）る（一）根（一）も（一）さ（一）ら（一）め（一）片（一）の（一）槌（一）の（一）類（一）片（一）の（一）光（一）る（一）物（一）茂（一）持（一）ど（一）是（一）ぞ（一）奇（一）怪（一）の（一）変（一）化（一）と（一）君（一）も（一）臣（一）も（一）慄（一）戦（一）ひ（一）る（一）忠（一）盛（一）其（一）比（一）に（一）昇（一）殿（一）も（一）ち（一）は（一）以（一）前（一）より（一）北（一）面（一）より（一）供（一）奉（一）せ（一）れ（一）紙（一）淨（一）前（一）め（一）あ（一）の（一）者（一）を（一）斬（一）る（一）む（一）其（一）射（一）殺（一）ま（一）と（一）も（一）せ（一）ま（一）う（一）と（一）仰（一）け（一）し（一）畏（一）る（一）歩（一）向（一）内（一）に（一）多（一）く（一）ける（一）狐（一）狸（一）の（一）牙（一）為（一）あ（一）も（一）あ（一）ら（一）ん（一）と（一）白（一）刃（一）を（一）振（一）ぎ（一）生（一）捕（一）み（一）せ（一）ん（一）の（一）と（一）近（一）ら（一）ふ（一）颯（一）と（一）光（一）と（一）多（一）く（一）又（一）は（一）消（一）し（一）う（一）と（一）ま（一）と（一）又（一）光（一）と（一）頻（一）と（一）無（一）心（一）と（一）組（一）ら（一）ふ（一）三（一）つ（一）と（一）噪（一）と（一）れ（一）は（一）変（一）化（一）あり（一）と（一）人（一）あり（一）面（一）も（一）さ（一）ら（一）め（一）火（一）を（一）燃（一）え（一）と（一）は（一）六（一）十（一）年（一）の（一）法師（一）御（一）堂（一）の（一）兼（一）任（一）ち（一）る（一）う（一）仏（一）の（一）燈（一）を（一）進（一）む（一）せん（一）と（一）く（一）瓶（一）の（一）油（一）を（一）盛（一）り（一）片（一）の（一）持（一）土（一）品（一）の（一）火（一）を（一）待（一）て（一）片（一）の（一）持（一）兩（一）の（一）濡（一）し（一）と（一）く（一）小（一）麥（一）の（一）蓋（一）を（一）叩（一）き（一）と（一）被（一）り（一）小（一）土（一）器（一）の（一）火（一）の（一）輝（一）を（一）銀（一）の（一）針（一）も（一）ま（一）と（一）夏（一）の（一）鉢（一）一（一）頭（一）ぬ（一）長（一）を（一）射（一）む（一）が（一）ら（一）ん（一）念（一）ち（一）ら（一）ん（一）を（一）忠（一）盛（一）ら（一）巻（一）動（一）弓（一）矢（一）取（一）に（一）優（一）し（一）る（一）物（一）も（一）あ



ことくさうも心寂愛と使へ。祇園女御と忠盛ふは下ぬ時女御(胎孕)を
 せしむる産らん子女あるは朕が子みせん男あるは汝(胎孕)の矢取(成立)を
 よとぞ仰る。つひに男を産し便宜もひは此(成立)を奏せんと待たる。法
 皇熊野へ御幸ゆく。紀伊系鹿坂の御奥に居させ暫く憩せらる。時忠盛
 敷ふある零餘子を袖に盛御前ふあり畏くさげまらる。いも子に
 言ふ不ふふこそぬふけと。中上より小頼と清公はあり。いも子に
 て中上をいせせと。附させぬふささくそ吾子とめてまはれ。此若君餘
 子不衣啼しむひさば法皇ゆき古く一首の御旅と下しゆふ
 夜るたまことと登りてよま乃代小清く登るふとこそあは
 其と清盛とまのふれたる。然る清盛公実ハ直人ふあふは白河
 法皇の也落胤ふちせし。又忠盛仙洞の局ふちせし女房あり。

夜くさひさる月を画し扇と忘とせり。傍の女房達は何
 國の月をげちちの東ちよとちと笑あり。いも子の女房
 雲井とよとてりりて月をたをちひていも子とせぬ
 と旅よりいも子に清くはせぬ。忠盛の八男薩摩守忠度ハ俊成卿の
 高弟ゆ。歌道もける風流人あり。此局の腹ゆとあり。仁平三年
 正月十五日忠盛五十八で失ひ。いも子嫡男清盛跡を嗣保元元年七月宇
 治左大臣頼長新院院崇徳ハ謀叛を勧め世を乱し。いも子時味方ゆ
 先と掛り。いも子勅賞行とていも子守り。いも子播磨守ふは同三
 幸大宰大貳ふ。又平治元年十二月藤原信頼源美朝が謀叛の時。後
 方ゆく賊徒を討平け。いも子勲功ふあり。いも子正三位つひて宰
 相衛府の督檢非違使別當納言も經く。刺座相の位に至る。内大臣ふ

平家物語圖會卷之二

左右と経從一位大政大臣小至王。大将少あり松とも。兵杖と後と道
身を召具。牛車輦車の宜旨と蒙王。乘あから宮中を出入り。
清盛公いまで安藝守より。時勢列安濃津より舟ゆく熊野へ系
らまける小大なる艦松へ躍りぬりまをる。推視の利生あへん。餘よとく。
精進潔齋の道ちから。自ら調味とく。其身郎後へも食あひひが。
そととる吉事連綿とく。其身郎嗣の官。大政大臣を畏あもる人。小至り子
孫の官途も龍の雲あよる。九代の先蹤を起る。目を度る。れ。
却説清盛公仁安三年十一月病小犯され存命のあふとく。十一月十日
五十二ゆく剃髪。佛門小入淨海と法諱は。宿病幸小愈六波羅館
と構らと。ゆ六波羅殿と称。自ら隨ひ附人言く。他家公達へ花
族も英雄も肩と比る者。烏帽子衣致以下。六波羅様とく。二天海

是を学ひぬ。聖主賢王の政。撰関の成敗も世小餘され。徒者なる。傍
小寄合何とち。排傾けやと。常の凡俗ちと。此禪門の世盛の程へ
聊忽小者。其故と入道相関の策。小四十五の童三百人。と洩つ。髪と
禿小切やと。赤死直垂を着せ。石仕と。京中。小路と。ゆく。往夜。
自ら平家を悪と。あゆ者。あ。を人。と。出せ。餘黨小觸。彼家小乱
入。資財雜具と。追捕。當人を擲。六波羅殿。引列。あ。目。小。小。
是。詞。頭。と。の。此。禿。と。これ。バ。道。を。馬。車。も。皆。と。通。らる。
禁門を出入せ。姓名小問。及。京師の長吏。これ。小。目。を。側。と
ま。ぬ。淨。海。禪。門。其。身。榮。花。を。究。る。の。嫡。子。重。盛。内。大臣。の。左。大。將。次。
男。宗。盛。中。納。言。の。右。大。將。三。男。知。盛。三。位。中。將。嫡。孫。維。盛。四。位。少。將。九。と。
一。門。の。公。卿。十。八。殿。上。八。三。十。餘。人。諸。國。の。受。領。衛。府。諸。司。都。合。六。十。餘。人。

うる繁栄古今例も有べし。忠盛昇殿の時、殿上の交快は諸
 卿も忌と忠盛を圍討めさせよるごありしが、忠盛を免れ、人の幸く
 しく難と道と一ともありたり。是遠くぬて、其子孫禁色雑袍、
 免と綾羅錦繡と纏ひ、惣領次男大臣の大将に成り、左右の相並ぶも
 例少、次第も其外也。息女八人、八人、櫻町中納言重教卿の簾中、八歳の
 時契約計ゆ。平治の乱後、引遠へ花山院左大臣殿の御臺所、成せ公達
 餘三、あへり。櫻町中納言重教卿と、一入、右ふら、廿二、ゆく皇子、
 生、建礼門院是、一入、六條振政殿の北政所、白河殿と称せり。高倉院也
 在位の時、弟母代と、准三、后の宣旨あり。一入、普賢寺基、実公、北政所、
 一入、冷泉大納言隆房卿、簾中、一入、七條修理大夫信隆卿、相具、一入、
 藝、列、嚴、鳴の内侍が腹、一入、是、後、白河法皇へ、献せ、偏、小女、御の、
 根、本

ちり。其外九條院の雑仕常盤、腹、一入、是、花山院殿の上、臈、女、房、
 ゆ、臈、の、由、方、と、や、る。日本六十六、々、函、平家知行の、函、三十餘、函、其、外、
 庄園田畠、等、の、数、と、あ、り。綺、羅、充、満、堂、上、花、の、ご、く、衛、騎、群、
 珍、萬、宝、一、と、一、と、關、る、と、な、り。歌、堂、舞、閣、の、基、魚、龍、爵、馬、の、
 珍、物、恐、ら、く、帝、關、仙、洞、も、是、ゆ、り、過、と、ご、ま、り。禪、門、か、く、天、下、と、掌、小、
 上、世、の、譏、人、の、嘲、と、顧、京、中、小、女、へ、一、自、拍、子、の、上、子、妓、王、妓、女、と、
 兄、弟、あ、り、刀、自、と、呼、と、一、自、拍、子、が、娘、之、妙、の、妓、王、と、淨、海、入、道、寵、愛、
 也、女、妓、女、も、世、の、人、り、く、る、と、斜、ち、る、母、刀、自、め、も、能、屋、と、造、と、せ、
 毎、月、百、石、百、貫、と、送、り、也、富、貴、を、究、世、を、經、り、抑、本、朝、自、拍、子、の、
 權、輿、昔、鳥、羽、院、の、御、宇、小、島、の、十、歳、和、哥、前、の、女、人、舞、出、せ、り。水、干、

立烏帽子たてえがし白鞠しろまゆろ巻まき指さし舞まひ々々男舞おとこまひと云いふ中なかつ比ひる鳥帽子えがし
 刀やいば除のぞく水みづ于をくり用もちるゆゑ白拍子しろはくしと名な付つける京きやう中なかつの白拍子しろはくし妓王ぎやうが
 幸さいの目め出で度たと文ぶん或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや或ある猜あや
 とゆるるぞ我われも付つくとんと妓二妓二妓福妓ふくぎ徳とくちとくゆめのまひ
 三年さんねんの後のち加賀かが園のうり佛ぶつ御ご前ぜんと十六じゅうろく歳さいふたる高たかひの白拍子しろはくし知しる
 是こゝ世よの入りくたはと大形おほがたちと佛ぶつほくくゆめの中なかつ。當時たうじめざし榮さかす
 多おほ平家へいけ太政たうせい入道にゅうだう殿でんへ召めとぬこそ本意ほんいるをれ遊あそみの習なひ何なんも苦くるし
 うるべ死し推おし泰たいしと見えやと或時あるとき西八さいはち條ぢやう殿でんへ来きたる入道にゅうだう殿でん大おほ怒どく左ひだり松まつの遊あそ
 都みやこふ名なと響ひびく佛ぶつ也や前ぜん丁ぢやうを糸いとくひとやたる入道にゅうだう殿でん大おほ怒どく左ひだり松まつの遊あそ
 者ものへ召めゆくとそまあるれ何条なんぢやう推おし泰たいする根ねやゆる其上そのうへ神かみとも佛ぶつとも
 妓王ぎやうがあらんぬへ叶かなふやと死しぞ疾はやく死し出でると仰あがせられぬ佛ぶつへとげら

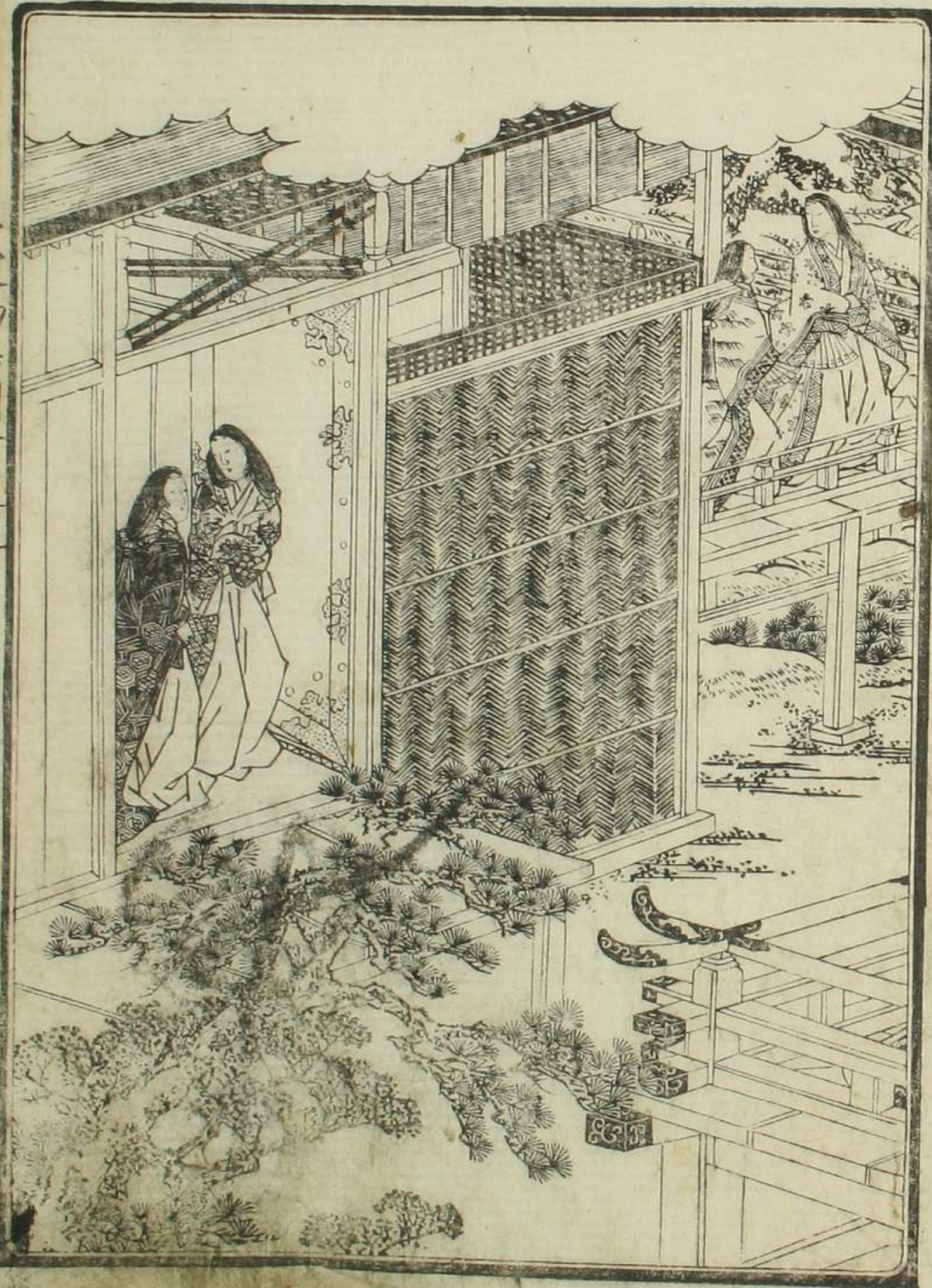
も云い放はなさし既すでに罷まひ立たんとせぬ妓王ぎやうへ乃な殿でんふやと遊あそびの推おし泰たいを
 常とこのゆめひふとそ少せう年ねんたもゆめ偶あひひ立たまひとまげらゆ仰あがせられ
 身みぞ不便ふびんちるゆをり辱はなす存ぞんずらぬ我われ立たる道みちるれば人ひとの上うへも
 多おほ之これゆとむ縦舞たてまひ歌うたふと彦ひこ賢さとしなくとも也こゝろ對面たいめんをりゆと返かへす
 花はなのぐさ死しの情なさけもととられば入道にゅうだう殿でんとては彦ひこ前ぜんがや對面たいめん
 と返かへさんとて使つかと立たると召めとたり佛ぶつへ車くるまめ来きくとんととらるるが巨おほ
 依より帰かへり来きりゆゑ入道にゅうだう殿でんへ出で合あはれり佛ぶつ今日けふの足あし泰たいへは
 かつとた妓王ぎやうが何なんもあらん切きつと進しんむゆめうかふゆめへは
 りと一ひと声こゑもゆめあらん今いままづと宣のたまふ佛ぶつ御ご前ぜん畏おそと
 御ご前ぜんの池いける龜岡かめおかの鶴つるこそ群むらむ遊あそぶめれと推おし返かへりて返かへり

三 家物語圖會卷之二

すま一はばえ使入へ皆耳目を敷い入道殿も面白きとふかめひ
多ひ。汝今やへ上ひふらぞ舞も定と能らんとく一番のむ鼓
赤石と舞せざる。佛御前へ髪姿眉目容貌世に勝と声清朗節
又上ひあり一と心も及む舞さす一ぬ入道殿際たて佛かを授
されたり。佛御前本とて推察の者めく既ぬかされ一と妓王御前の
取成り多依く召返されいぞ早く暇治くは一あせとす一と入道殿
さく其儀へ叶へた。但一妓王が御前を憚るぬや其儀るく妓王成
とそ出さめと宣へ佛御前らぐあるぬのいふたそのか召返とん
取うくいふ後とも忘とのび召とく又とまるとも今日暇と給らん
とぞや。入道殿今へ左右き妓王疾く罷出よと使重アと三度やぐ
立らとる。妓王のくも多ひ儲る道ちれたとけ昨日今日と多ひの

よん入道相國のふもけふまらう。頗小宜へ回帚塵撫をさ出た
みそ定なれ一樹の陰ふ舍り同一流を柳がふ離別へ悲さ習ぞう。思
是と三年が程栖馴し名残も惜とくうひるた涙ぞすくける。妓王今
思諦かたるう考らん跡の形えふゆえむひえはくも障子か歌と使付
萌ゆるも枯るも同野辺の草のさう秋かあそくまつた
叔車か乗く宿牙へ帰。障子の内か倒れ臥位より外のとぞおた母
妹ととんく。いふやと問われた。妓王も左右の返辞も及ば具くは
女か訊ねくまそとありしも知くたれ去程か毎月送られし百石
百貫も推止らと今へ佛御前の由縁の者ぞ望く樂々榮へたる路中の上
下傳へ使も実か妓王こそ西八條殿より暇給つと出されしと名の見泰
しく遊んと使者を立るもあり。或る文と書けりあり。さきか妓王今と

平家物語卷之三



白拍子
 障子
 評歌を
 昔残を
 圖

三才物語圖會卷之

又侘ふ對面し遊ひ戲をたると。文よふ取入てもな。使と饗待
 ともあつり。かゝり其年も暮あたる春ゆもなり。入道相
 國妓王が并へ使者を立ち。ゆふ妓王其後何とある。佛御前が餘
 徒然け小えちるふ。まゝ今様歌舞つ。かれを慰よと宣ひける。妓王
 兎角の形返辞ゆも及ば涙を押し取ふ。入道殿累々何とく妓
 王を左も右も返辞せや。さぬそ養ふべかり。其根合せ淨
 海も討ふ旨もこそ宣ひたる。母刀自も是を養ふ悲く。位と教訓
 入道殿の旨も逆つ命とも召る。さありて我身うた世
 ぬなごふ。つても。わらに我露の命を延るも縮るも。そののぬあり
 と強ふ辣多るゆ。妓王のまゝ。と心定し上あれども。母の命と背くと
 位と又出立し心の中そこり。るる。独あんも心う。と。妹妓女其外白

拍子二入摠とく。車小取来西八條殿へ。泰し。日来言とつる。所へ入れ
 る。違下りて座敷もつひ置と。と。妓王の何とぞ。我身過失と
 あく出。と。ふあ。座敷を。さ。げら。口惜さ。と。悲し。宵。あ。り
 人ふ。と。せと。と。押る。袖の。間。り。も。餘り。と。涙。溢。と。る。佛。前。是。と。て
 餘り。の。哀。と。ふ。ま。え。と。れ。へ。入。道。殿。ゆ。け。る。あ。ま。の。ゆ。ふ。妓。王。と。と。そ。ん。じ。目。ま
 石と。一。所。め。も。は。と。と。か。く。と。り。へ。暇。と。終。り。と。い。え。と。と。な。れ。た。入
 道殿の。ゆ。も。叶。ま。れ。と。宣。ひ。た。力。も。暨。り。たり。入。道。殿。ま。と。妓。王。の
 對面し。ゆ。ふ。妓。王。を。以。来。へ。遠。う。り。る。と。と。歌。ひ。舞。し。と。佛。が。と。と。と。
 慰よと宣ひたる。妓王も。何ゆと。ともか。くも。仰へ。背く。ま。と。と。涙。の。洩。と
 か。く。今。様。と。歌。ふ。と。佛。も。昔。へ。凡。夫。と。我。ら。も。つ。ひ。ゆ。佛。の。ゆ。と。も。仏
 性。具。せ。る。を。隔。る。の。と。と。と。燃。け。と。位。と。も。二。返。歌。ひ。と。り。け。と。と。其。座。の

平家物語圖會卷之一

用ひりやうまきば情物を案じどよば彼婆の栄花へ夢の妻人方へ稟かて
 佛教ゆゑ遇ぐ。老少不定へ出入息も待たず。鳴蟬拍妻を猶ほまじ。
 一旦の栄花は誇り。後世も泥梨は沈果んちを憂ふこそ今朝終は出か
 成るまじれと。被る衣打除と。尼小成と出来ずんか。かきまも変
 一上目来の科を赦ま。この念佛一蓮の身と。ん此上中
 心ゆらぐ。バのちも迷ひ行り。ん昔の途岩のそま松が根ゆ倒れ。
 命の消ぎ際へ念佛。往生の素懐を遂ひ。んと顔へ袖ち。あて雨
 とく口説けと。妓王も涙ゆくと。あぐひまん。と夢ゆもあは浮世の
 中の嗟嘆ちれば。身の憂と。そとちん。まう。あそ世を恨と。身を歎き
 て。姿と。変るも。理ち。也身へ恨も。なく。歎きも。なく。今年。終ふ。十七。ゆ。そ
 と。ど。ふも。穢土を。いと。浄土を。願ひ。多。入。大道。心。嬉。く。く。係。大。善。知。識

る。諸。が。後。世。と。管。ん。と。四。人。一。所。の。菴。で。居。く。佛。前。の。花。香。を。供。へ。他
 念。も。ち。行。ひ。ま。し。け。る。が。遅。速。を。も。ろ。各。往。生。の。志。願。を。果。せ。と。そ。ま
 一。と。れ。ば。後。白。河。法。皇。長。講。堂。の。過。去。帳。ゆ。も。妓。王。妓。女。佛。刀。自。等。が。亡。矣。と。四
 人。所。載。ら。と。ん。有。る。く。一。と。ふ。こ。と。也。

近衛院二条院二代の右延暦與福額打論攝政家の供人資盛の不礼を各
 昔より源氏平氏朝家小立く。王位に隨ひ朝権を握ん。者ゆ。互。戒。之。加
 一。と。代。の。乱。も。ち。り。一。保。え。ぬ。為。義。斬。と。平。治。ぬ。義。朝。誅。せ。れ。一。後。未。も
 の源氏或へ失と。又へ流。れ。今。や。平。家。の。二。類。法。と。繁。昌。一。未。の。代。ま。ど。も。何。夏。の
 あ。ん。と。こ。と。一。と。れ。ど。も。七。十。四。代。鳥。羽。院。皇。駕。の。後。の。兵。革。う。ち。續。く。死。流。流
 刑。岡。官。停。任。毎。ぬ。行。と。海。内。も。溢。る。ん。就。中。永。曆。應。保。の。比。り。院。の。近。習
 者。と。内。り。戒。り。内。の。近。習。者。と。院。り。戒。ら。く。間。上。下。怖。く。安。み

心腎主上上皇後白河也父子の由何々の由隔うらんれれ九人の外の
 りた三より。主上へ院の仰を常ゆ替さすゆ中の人耳目を欺う。世
 以く大に傾けりて多り。故近衛院の后大皇太后宮へ大炊御門右大臣公
 能公の由娘待賢門院へ先帝の后とさせゆ後へ九重の外近衛河原の
 御所へ根住多ひ前の後の宮ゆく幽る由形勢しく渡らせゆひいぐ永
 曆の比へ後年廿三ゆも成せゆれ誘盛も少しとさせますませゆも天下
 第一美人の姿ゆしくれゆ主上色ゆのと添るゆゆめく竊小高刀士ゆ
 沼しく外宮ゆ引求むるゆ及ぐこの大宮の御所へ密ゆ艶音あり。
 大宮敢て改召も入るゆとせゆ二向名總ゆ頭とて右内入内ゆゆえり右大
 臣家ゆ宣旨と下ゆ。高刀士と唐の女宗腹ゆの内官揚貴地ゆ此と天下ゆ於て異
 なる勝るゆれば公卿衆議ゆと各異くと演先異朝比先蹤へ則天皇

后へ太宗の后高宗の継母へ太宗崩御の後尼と有りて皈俗せりえ。
 高宗の后ゆ立ゆ。それへ妹庭の先規我朝ゆ神武天皇以降七十餘
 代ゆと二代の後の例なりと諸卿一同ゆ訴ゆすれゆ。上皇も然るゆ
 うゆゆゆよりゆさゆ多た。主上仰るゆ天子ゆ父母ゆ。我十善の成功
 小因ゆ。今萬乘の宝位を保つ。是不ゆの工とゆ。慮慮ゆ任せゆ。死とて
 かく御入内の日ゆ宣下せゆと上へ上皇も力及むせゆ。大宮かくと
 せゆ。召ゆ。涙ゆ沈ゆ。先帝ゆ後とさせゆ。久壽の秋同ト野原の露
 とも消家ゆと出世ゆも道とゆ。今ゆく。憂ゆ。耳ゆ。変ゆ。とゆ
 歎きゆりける。父の大皇ゆ。入りさゆ。ゆ。ゆ。ゆ。狂人とせゆ。こゆ
 命と下さる上子細ゆ。所ゆ。速ゆ。ゆ。若皇子ゆ。疑
 生ゆ。君も國母ゆといゆ。愚老も外祖と仰るゆ。瑞相ゆ。ゆ。是ゆ

三



佛前
發心
祇王の
庵と
訪ふ
圖

平家物語圖會卷六十一

十四

其夜延曆與福兩寺の大衆額打論ゆ互に狼藉小及び二天の君御葬送の時南北二京の大衆悉く供奉し御墓所の廻り我寺の額と打とあり先聖武天皇の願東大寺の額を打次小淡海公の願興福寺の額北京の願興福寺小向て延曆寺の額次小天武帝の願教待和尚智燈大師の草創を園城寺の額を打然るといふ必ひけん先例と背東大寺の次小興福寺の上小延曆寺の額と打間南都の大衆免やせ角やせよと僉議せし處興福寺西金堂衆觀音房勢至房とて空へる大惡僧入ありり觀音房へ黑糸威の腹巻小白柄の長刀死短取勢至房へ崩黃威の甲小黒漆の大太刀と持て走り出延曆寺の額を切落し散らさる破りうとや鳴へ瀧の水日照とも絶すと歌ひ雜る南都の衆徒の中ぞ入るる山門の大衆狼藉せむ向ひと登れど心深う心方りやけん一言葉も出さば帝これさるひく返へ公

ね草木返も愁るる色ゆるる死の此騷動の浅猿さ小高も卑きも肝魂と失つて四方へ皆退散も同廿九日午の刻并山門の大衆衆へ下落もとやへる武士檢非違使西坂本小行向ひ防けとたるたせ押破り丸入も又何者うちかへる二院後白河天皇山門の大衆小仰せく平家と追討せんと突へる軍兵内裏小恭に四方の陣頭と堅め平氏の類へ皆六波羅小弛集の院もいそ六波羅へ御幸も清盛公其時へいやご大納言の右大将ゆくけり大衆恐と騷れり小松殿何小依く唯今去るるゆと静めさせり心も女も騷言ると駭くゆと山門の大衆六波羅へ寄せり清水寺小推寄佛閣僧房宇も残さば燒拂ふ是へ額打論の意恨とやへ清水寺へ興福寺の未寺へ小依り其燒しつり朝觀音火坑變成池へ如何と書く大門の前を建次の日曆劫不義力不及と返りの札を打りける衆徒

又平大納言時忠卿とやも此女院の御兄と云ふ之内の外戚たり内
外執權の臣とぞ云へ。其比の叙位除目とやも偏此時忠卿のま
じりの揚貴妃が幸ある時揚國忠が榮るる不異たり世の覺時のま
めでしり死入道相國天下大小のる公宣ひ合せれば時の人平與白と
ぞやと云ふ又嘉應元年七月十六日一院出家あり法障と行真と録
なるされは萬機の政と知し召るる院と内と分るる院中近く
公卿殿上入上下の北面近官祿身小餘り人心の習ひ猶厭足ぐ分外の望
どかると云ふり。法皇も内々仰るる昔より朝敵を平する者多しと
りた貞盛秀郷が將門を伐頼義へ責任宗任を伐義家を武衛家衛茂
責るるも勸賞行まると受領中過さる死今清盛心のまふ振舞
あそびる魚うらぬこれも世世成る王法のをぬるも云ふと仰る

けはた次ぐちなれば洗戒もな。平家も又別く朝家と恨まると
もぬるり。世の乱初る根本へ云嘉應二年十月十六日小松殿の次
男新三位中将資盛其時へ未越前守と云生年十二ふちをける雪
降る枯草の氣色滅ぬ面白うりける。若死侍は二十騎斗召具し。蓮
臺野紫野右近馬場小打せ。鷹餘三居を。鶴告天子を。追立く終
日狩暮し。薄暮ぬ及く六波羅へ歸らる。其時接祿へ松殿房公の
やとく。東洞院の御所より泰内郁芳門より入御あると大炊御門
を西へ御出する。資盛朝臣大炊御門猪熊ゆと。ちぬく兼合出供の人
御出する小兼打へ狼藉ぞ下ひくと。制しけはた。餘り資盛方勇
元來世とせよせざる上召具し侍は二十内の若りのたれば。禮儀法
弁へる者一人もあ。殿下の出出とも云は一切下馬の礼儀ゆも及び只破

く通さんときさる間暗くらし。つやく太政入道の孫もあつた。又少々も
 知とた虚不知しく。資盛朝赤を始としく。侍た皆馬より取く引かす。一
 頗耻辱ぬ暨る。資盛をうく六波羅へ帰す。祖父の相國禪門の
 此より訴すされれば入道殿大に怒り。譬殿下ちりとも淨海がゆは六
 多の資盛は左右なく少た者ぬ耻辱をうらまけるこそ遺憾ちるる事
 よりしく人ぬ欺るぞ。此資盛殿下ぬ多ひ知せぬはゆとてあつと宣へた
 重盛卿すされけるは是はゆも昔うらまえては頼政光基とち源氏たふ
 朝らとともいづ一門の耻辱ゆも少く。重盛が子としく。殿の御出ぬ奉違
 下乗もせざる返くも尾籠ぬ火とく。事小遇ふ侍たされ石寄と
 自今以後汝亦能く公はる。禪と殿下へ無礼の由をすさむやと多そ帰
 されたる。其後清盛禪門小松殿ぬ沙汰せむ。片田舎の侍の窮く剛強

ちる入道殿仰の外世ぬ又恐ろしとる。と多る者た難波瀬尾を始と
 しく。都合六十餘人石寄と。来るた日殿下御出ぬ。何方ゆくも待受
 まり。前駐ぬ隨身たが髻をぬき。資盛が耻辱げとこそ宣ひくれ兵た畏
 とく罷出殿下これるを夢ぬも知し召とて主上明年ぬ元服御加冠拜
 官のぬ定のぬ督くぬ直廬ぬも分ぬゆ。常の御出より引絡せぬ。叔今
 度待賢門より入御ある分ぬと中御門を西へ御出ぬ。猪熊堀川の
 辺ゆ。六波羅の兵た混曹三百餘騎待受なり。殿下を中ぬ兵電あふせ
 前後より一度ぬ岡を嘯と作す。前駐ぬ隨身たが今日と曠と懸束し
 右の府生武基が髻をもめとる。其中ぬ藤藏人大夫隆教が髻と剪
 とく。髻とけは髻とぬへく主人の髻とぬへくと云合くと切る。其

後之此車の内へも弓の弭つた入るごとく簾もぐり落し。此半の當胸
鞆切放ちかく散く狼藉し。飲の罇を作つ六波羅へ歸来せしむ
入道殿神妙と宣ひて。されば此車添ぬ因幡の三使鳥羽の國久
丸と云男下臈ちれたさぐくし。此者ゆへ御車を修補棄せざる中
御門の御所へ還御せざる東帯の袖ゆへ。此涙を押しせ給ひつ還
御の儀式あさやも中々も中々大織冠淡海公のゆへ。奉るすふ
及む忠仁公昭宣公より以來攝政関白のかる難ふ遇せ給ふこと未
兼及びあまそそ平家悪行の肇ちれ小松殿此由をゆき給ひく大内恐
と騒またり其時行向ふ侍た皆勘當せしむ。縦ひ入道殿はるる
不忠茂を下知しゆへた。ちと重盛ふ受をうり。急せざりけるぞ。九の資
盛奇怪の梅檀へ二葉よる香りとこそせ。既ぬ十二の成人者礼義

を存知く振舞ふ。かちの尾篭を現し。入道殿の悪名と云。
不孝の至汝独ふありたりと。暫く伊勢國へ追下さる。此は此大將
を六君も臣も御感ありと云。
新大納言成親卿謀叛山門神輿を振奉り師高兄弟が濫行を拵治せ
主上御元服の定其日延延と同廿五日院の殿上ゆく御定はるる。攝政
殿同十一月九日兼宣旨を蒙せ給ひ。同十四日太政大臣小昇せ給ひ。
同十七日慶やのひら。世の中猶苦と敷ぞ。去程今幸を
尽く嘉応三年小成ふ。正月五日主上元服あり。十三日朝覲の行
幸あり。法皇女院待受奉り。初冠の御粧ひり。をりめぐり。あはれ
入道相國の娘を女御小進せり。御幸十五法皇は猶子の儀あり。妙
音院殿其比未内大臣の左大將ゆく。きくけるが。大將を辞し。あ



東山鹿谷
俊寛の
會合の
圖



東山鹿谷
俊寛の
會合の
圖

東山鹿谷
俊寛の
會合の
圖

とあり。時不徳大寺大納言実定卿。其任不當らるる仁らり。花
山院中納言兼雅卿。故中御門藤中納言家成卿の三男。新大納言
成親卿も達々大将を拜れ。法皇の御前も殊小宜し。しゆ是非小
相叶んとく。様この初禱立願あり。夜々忍々賀茂の上の社へ歩行ゆ
奉らるる。此比の叙位除目とす。法皇内のお討ひもあらず。撰関の
也成敗ゆも叶は一向平家の終るべ。入道相國の嫡男小松殿大納言右
大将より左の親王。次男宗盛卿中納言より。数輩の上臈と起右大将
小成多入中ゆも徳大寺殿と一の大納言ゆ。花族の家嫡才学雄長英
名高より小平家の次男小加階と起らるる。遺憾の次第定々
也出家もあらん。と人々私語あをれ。暫く世の成んねとせん。とく
大納言も辞し。龍居あり。新大納言成親卿宜ひ。とく徳大寺花山

越らんとん。如何せん。宗盛も越とてそ易らね。此上へ友を語り。ひのゆも
平家と亡し。恥辱を雪んと。俄に北面又も諸武士を語り。東山廉谷。後三
井寺の續三屈強の城地あり。此小俊寛僧都の山庄あり。小合。内謀を淡し。
多具を調へ。弓箭とらる。とらぬ父の卿。此仁の齡の比。僅中納言。其末子ゆ。正
二位大納言。亦至。大國を賜。家族所從朝恩。小倚あり。何不足あり。か
心附。とら。其上平治の乱ゆ。越後の中將とく。信賴卿同心の。其節。殊せ。小
登り。小松殿色。とら。有られ。頭を接。其恩儀も忘。此度の企。天魔
の牙。為。も。小。肇。の。わ。と。人の耳目を忍。と。つ。慎。も。あ。高。声。小。太。妻
を。論。淡。あり。或。夜。鹿。谷。法。皇。も。御。幸。あり。故。少。納。言。入。道。信。西。の。子。息。淨。憲
法。印。も。也。供。ゆ。其。夜。の。也。酒。宴。ゆ。彼。一。事。の。口。披。せ。れ。時。法。印。増。め。耳。あ。り
や。と。い。人。餘。言。り。ぬ。今。あ。も。洩。空。へ。天。下。也。大。支。ゆ。及。ゆ。ん。と。り。大。納。言。也。色

晉くくつと立とるが御前小立らと一瓶子を狩衣の袖から引倒されど。
 法皇殿覽みこ。あまのふと仰あまは六納言立帰つて平氏倒せいとせよ。
 法皇笑壺み入せらる。者たまはく後樂仕と仰けは平判官康頼と来て。
 ぬ餘と平氏の言ふ小酔いといふ。後實僧都さそそれいひはる。登ららん。
 西光唯頸を取ゆと下とく。瓶子の頸を取とぞ入ぬる法印餘の浅猿。
 法く物もやされど。返くも危くしつた。成親卿落れぬ。與力の輩。
 推くぞ近江中將入道蓮淨俗名成正。法勝寺の執行俊寛僧都山城守基兼。
 式部大輔雅綱平判官康頼宗判官信房新平判官資行武士ゆは田藏人。
 行綱を始とく。北面の者共多く身けり。俊寛僧都へ京極の源大納言雅。
 俊卿の孫本寺法印寛雅ゆ子に祖父大納言いさく弓矢取家ゆわぬ共。
 腹あは入ぬ。三条坊門京極の宿所中へ佇立齒を切悲くかえさるゆ入。

も容易通されど。かく怖し人の孫ゆあや俊寛僧都さそ心も猛く。奮とる氣。
 質ゆあやうら謀叛小子せん成親卿。田行綱を召と。今度御座を六一方。
 の大将小頼は仕課する。因をも庄をも所ちふ任と。先弓裏の料ゆとく。
 白布五十端贈らとて。安元三年三月五日。妙音院殿太政大臣小轉下。修る香。
 小松殿源大納言定房卿を越と。内大臣小成ゆ。頼と大饗を行る大臣大。
 將の尊者ゆ。大炊御門右大臣經宗公とぞ。叔と。北面へ白河院の時始。
 と置と鳥羽院の時。追へ。身ゆと。擧動とあり。後白河法皇ゆ。至と。上。
 北面へ。殿上の交を免さる者。多と。奢の心より。謀叛小組と。小至と。又院。
 中の切のと呼と。西光法師の子小檢非違使五位尉加賀守師高と。威と。
 の入る。國勢を行ふ。小那礼那美多。安元二年の夏。師高が弟近藤判官師經。
 と加賀の國目代小補せられ。時加賀へ下着間も。國府の辺。鶴川と云山寺。

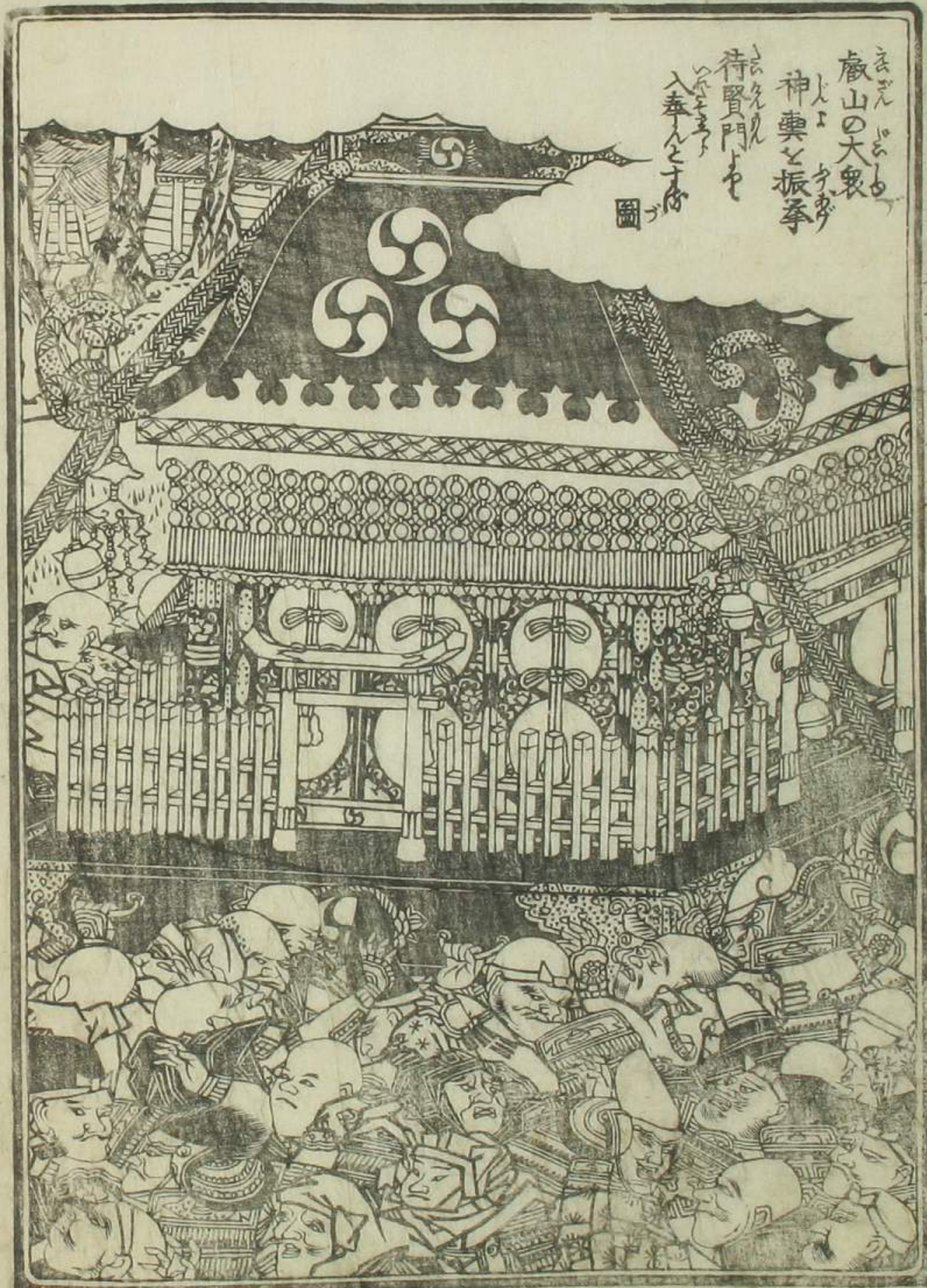
乱妨の牙行ありし。淨圓及びびるるが。目代僧徒の追々なり。由是當國の
 在應等千餘人を催し集め、鶴川に押寄坊舎残り、燒拂入鶴川、白山の
 末寺の也。此に依り、老僧を先達と進め、ける白山三社八院の大衆
 悉く集合し、其勢二十餘人。七月九日の暮方、目代師經が館へ寄、翌朝より
 合戦始り。露吹結ぶ秋風、射向の袖を翻し、雲井を照し、縮書、虎の星を
 輝き、法師をよの戦強く。目代叶はし。夜、北の京より、由是大衆、直山門へ
 奔んとく。白山中宮の神輿と師王、比叡山、振揚同八月十日、東坂本、小着、輿、由
 客人の宮へ入る。此宮、白山妙利権現ゆき、まがせ、父子の山中、神心
 悦せむんと七社の神人、袖をつら、法施、祈念、取ぐ、山門の大衆、より、團司
 加賀守、師高を流罪、近藤判官、經高を禁獄、せられ、給る、金、給、奏、空、度、く、小
 及び、の、裁、許、更、決、著、あ、加、茂、川、の、水、雙、六、の、塞、山、法、師、是、ぞ、朕、が、心、叶、ぬ

のと、白川院も仰ありし。昔より山門の亦、松、他、小、異、あり、大藏卿、為、房、太宰
 権帥、李、仲、卿、さ、も、朝、家、の、重、臣、あり、山門の亦、松、ゆ、流、罪、せ、られ、師高
 ぞ、死、の、數、お、ち、ら、る、べ、死、あ、る、を、延、の、也、沙、汰、也、日、吉、の、祭、礼、を、打、苗、め、安、元
 三年四月十三日、辰の二點、十禪師、權、現、客、人、八、王、子、三、社、の、神、輿、を、鎧、陣、頭、振
 奉、奉、る、下、り、松、き、れ、堤、加、茂、の、川、原、河、合、梅、を、柳、原、東、北、院、の、辺、に、神、入、宮、仕、と
 大衆、專、當、滿、く、神、輿、二、條、と、西、へ、入、せ、む、神、宝、天、小、輝、き、日、月、地、小、預、め、入、と
 愕、然、と、つ、く、源、平、西、家、の、大、將、軍、小、命、と、四、方、の、陣、頭、を、固、警、言、大、衆、を、防、ぐ、を、死
 せ、仰、ご、さ、る、平、家、ゆ、小、松、内、大、臣、左、大、將、重、盛、公、其、勢、三、千、餘、騎、あり、大、宮、面
 の、陽、明、待、賢、郁、芳、三、の、御、門、を、固、め、弟、宗、盛、公、知、盛、卿、重、衡、卿、伯、盛、盛
 卿、教、盛、卿、經、盛、卿、西、南、の、御、門、を、衛、護、源、氏、ゆ、大、内、守、護、源、三、位、兵、庫、頭、賴
 政、卿、郎、等、虫、渡、辺、皆、同、授、を、先、と、く、僅、三、百、餘、騎、北、の、御、門、邊、殿、の、陣、と、固

自ら所へ廣し勢へ少し。扶疎ふえし。大衆是を幸ひ北の御門より神輿を昇
 はんとき。頼政卿急ぎ馬より飛下。胃を御漱み水しく。神輿を拜し奉る
 候き皆かゝのごと。渡邊長七唱ふまうくとや。合らと。ゆゑ唱ふ小接と。黄小
 匠。重鑑着く。赤銅作の太刀を帯。二十四差。白羽の矢を擔。滋藤の
 弓を脇挾。腕へ脱く高紐。御神輿の前へ平伏。暫く静せ。源三位殿より
 裏徒の由中へせとい。今度山門の由訴。弘理運の条勿論。存とい。裁許。逢く
 まそ。餘所ゆも。恨み覚はれ。神輿入る。子細み及い。但し。頼政
 無勢ゆ。用く入る。陣より入。せ。ひ。山門大衆。後日京童部の口號。こ
 も成。さ。左右。用。入。も。宣旨を背く。み。又。防。拒。んと。い。
 年来醫王山玉。小湯。仰せ。今日より。長く。弓矢の道。別。と。ひ。ひ。彼。と。い。
 是との。難治の。至極。ふ。東の。陣頭。へ。小松殿。大勢。ゆく。固め。れて。其。陣。より

入せ。る。金。く。の。と。や。述。若。大。衆。惡。僧。は。今。更。何。条。猶。与。づ。唯。此。陣。より。入。在。凡
 や。と。圓。ら。が。老。僧。の中。小。三。塔。の。僉。淺。者。と。や。へ。攝。津。の。堅。者。後。兼。天。台。法。華。の。豪。運
 とも。公。心。の。口。上。に。我。等。神。輿。を。先。小。立。訴。治。り。上。の。堅。陣。を。打。破。く。こそ。山。門。の。威
 を。後。世。中。も。示。と。金。一。頼。政。卿。へ。六。孫。王。以。來。源。氏。嫡。の。正。統。弓。矢。を。わ。く。い。ま。ご
 不。覺。と。ゆ。ま。九。武。道。ゆ。を。限。む。歌。道。ゆ。も。傑。と。一。丈。夫。中。に。近。衛。院。の。由。時。當。座
 の。由。會。小。深。山。花。と。云。脚。題。を。皆。く。詠。旧。し。る。題。ゆ。を。却。く。沈。み。及。ま。る。頼。政。々
 深。山。木。の。その。梢。とも。ま。ざ。り。一。枝。を。花。み。あ。ら。れ。み。ま。る。

此。秀。逸。ゆ。御。感。不。預。り。優。勇。なる。を。今。此。時。小。臨。で。い。く。ぞ。恥。辱。を。与。ふ。と。唯
 神。輿。を。昇。候。と。や。け。と。先。陣。より。後。陣。迄。大。衆。を。く。と。同。東。の。陣。頭。待。賢。門
 へ。入。る。ゆ。と。合。戦。生。ま。り。武。士。散。れ。射。奪。る。ゆ。と。禪。師。の。御。輿
 中。夫。共。數。三。射。立。神。人。官。仕。衆。徒。或。射。殺。れ。衆。を。蒙。り。喚。呼。ぶ。声。梵。天。の。帝



釈地軸の堅牢神も敬るものと乾坤の響きやうの大衆神輿を陣頭め振
 捨はく本山へ飯の登りたり。とて法皇の殿上ゆ。諸卿余儀を遂永久より今
 治兼近 當安元三年 神輿入洛のこ六箇度のりも毎度武士の仰せ防せらるるとい
 片神輿を射奉りて此度始に神人の矢を被取せ保延四年七月の例に依て神輿
 祇園の社へ入るる靈神怒ると言ひ災害衢の元とより恐くとすあり。同下は十
 四日夜半并山門の大衆又野々下山せとやへへ主上夜中腰輿めめ。院の
 御所法住寺殿へ行幸なる中宮宮へ御車ゆく。他所へ行啓ありたり。関白
 殿太政大臣殿以下卿相雲客皆供奉せらる。小松の大臣の直衣の矢を負て隨ひ
 奉り嫡子權亮少將維盛へ束帯の平縁擔ぐそまふれぬ京中貴賤騒々喧
 へ。これとて山門の神輿の矢もも神人射殺れ衆徒も多く負て山門大
 宮二宮講堂中堂都く諸堂悉く焼拂く山野の交るなり。三年の衆徒同

小倉茂を依り大衆のヤ所法皇より計ひあふるとやとて山門の
 上綱等子細を衆徒小觸んと登山せと兼り大衆西坂本山下に皆追返せ
 平大納言時忠卿其比末左衛門督ゆくかきけるが上卿めら大講堂の庭
 小之塔會合し。上卿の冠と打落し其身を繩巻ぬ。湖水小沈めよとて
 既ふらうとて一時時忠卿大衆へ使者を立暫く静りて衆徒の水中へ
 登らるのいとく。懐より小硯疊紙取ぬ。一筆書く大衆の中へ送らる。
 是を披きまらる。小衆徒之致監悪者魔縁之所行也明王之被加制者
 善迹之加護也とて書きこれ。是をこく大衆むくと服し谷々の各坊へ
 下り飯をぬ紙二句を以て三塔三千の憤を息め公私の耻をも直れぬぞ
 ちり丸山門の大衆の發向の猥れは斗くとて之を理をも存ドけると人々感ト
 合とらる同廿日花山院權中納言忠親卿を上卿め。國司加賀守師高を

關官せしめ尾張の井戸田へ流され弟近藤判官師經と禁獄せしむる
 十三日神輿を射奉り武士六人を獄に下さし小松殿の侍共同日戌
 刺斗堀口富小路より火中へ折節異の風烈しく吹くれ車輪のおとく
 るる火三町五町を隔て乾の方へ飛越しく焼行程小具平親王の十
 種殿北野天神の紅梅殿橘逸勢の蠅松殿鬼殿高松殿鴨居殿東三
 条々嗣大臣の閑院殿昭宣公の堀河殿を初る昔今の名所三十餘所
 公卿の家十六軒其外殿上人諸大夫の家注し尽せぬる
 大内小吹付朱雀門より忘天門會昌門大極殿豐樂院諸司八省朝
 所一時の内灰燼と成けし家々の日記代々の文書七珍萬宝數を竭
 しく土塵と交え人の老少牛馬犬猫まじり死するに若し是全く山
 王の咄咄と怖しあり大極殿へ清和天皇貞觀十八年小始と焼く

一、同十九正月二日陽成院の即位ハ豐樂院ゆゑなる元慶元年四月
 九日事始り同二年十月八日落慶の処後冷泉院天喜五年二月廿六日
 年康平元年と此三月廿六日又燒たり治曆四年八月十四日小夏始りけし成就を
 する平家物語の事又燒たり治曆四年八月十四日小夏始りけし成就を
 ぬ後冷泉院崩御の後三條院延久四年四月十五日造り出されし文人侍を
 ちりの伶人樂を奏しは幸なり今世も季小成と團の力皆衰へしは
 其後の竟小造られど

